

## 『働くハズ、働いてもらへんハズの難しさ』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

未だ実感のないところだが、数えて還暦を迎える年に突入し、プレイヤーとして、経営者として、自身のワークライフバランスを考えることが増えてきた。

昨年の社会ニュースであるが、その前年のクリスマスに電通の1年生社員が自ら命を絶った。

将来有望な若者が、その時、何を考えていたかは無論、知る術も無いが、その後、母親が労働基準監督署に労災を申請。それらが認定されるやいなや、厚生労働省が電通本社の強制捜査を実施。

その結果、社員に違法な長時間労働をさせた労働基準法違反として、故人の直属上司が東京地検に書類送検され、ついには社長の引責辞任にまで至った。

電通のような一流企業に限らず、ポジション争いにしのぎを削るスポーツや芸術の世界など、古今東西、あらゆる場所で、誰もが羨むようなエリートや挫折は存在する。小生が属する医療界、科学の世界も然りである。

そして、それ以上に無名な仕事場で寡黙な人間が理不尽な上司の命令に従わざるを得ない場面は、限りなく存在することに違いない。

そのなか、今回のスピード立件については、その帰結が最悪であったこと

に加え、手塩にかけて育て上げた母親の執念と、本人が東京大学卒業の才媛で、美人であったこと、名前も可愛かったこと、世界有数の広告代理店として派手なイメージがある電通社員であったことが衆目を集めたことも加味されているのであろう。

年の瀬に、「おとしませ」をつけたかのようにも見えるこの事件。勝手な想像だが、同じように厳しい縦関係や長時間労働が横行する新聞、テレビなどのマスコミが、仲間である広告代理店の企業体質を批判するのも苦しかったことであろう。

小生は13年間、勤務医をした後に、当たり前に家業を継承し、20年となる。そこで、確かに働かされる立場と働かせられる立場の違いは大きかったのは実感だ。

そして、今は管理者として、全ての職員に対してフェアな心身管理に務めているつもりだが、どうしても能力のある人間に無理をお願いし頑張りすぎてもらうのが実際である。

産業医とお付き合いをする機会が多いが、その業務の軸は、じん肺や滑落事故に対する呼吸器内科や整形外科の仕事から、すっかりメンタルケアに推移し、現在は精神科医が完全な主役と聞く。

女性の社会進出や高齢者雇用など「働き方」が真剣に問われる時代、電通事件から色々なことを考えさせられる。

全く違う次元の話だが、お騒がせのアイドルグループ・S.M.A.P解散劇への感想を述べる。発端時より、ジャニーズ事務所に対する帰属意識と恩義を貫き通したキムタクの姿勢に感銘した。あくまでも、決して独立するわけではなく、独立される立場にある経営者の所感であるが…。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。  
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。  
東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳大学客員教授。  
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。  
伊藤病院 www.ito-hospital.jp  
大須診療所(名古屋分院) www.osu-shinryoujyo.jp

